都道府県名　　千葉県

平成21年度　自閉症に対応した教育課程のあり方に関する調査研究事業　中間報告書

1　研究のねらい

本校は知的障害を主とする特別支援学校である。昭和４５年に肢体不自由養護学校の施設併設の分校として　スタートした。隣接する知的障害児施設や自閉症児施設に入所し、通学している児童生徒が在籍者の約半数を占めている。また、約４割の児童生徒は自閉症、自閉的傾向を併せ有する。

本校では、平成１７年度より、５つの教育課程を編成した。その理由の一つには自閉症の二次障害として現れやすい強度行動障害の児童生徒の教育的ニーズに即したきめ細かな指導を追求し、従来の教育課程に加えて、新たに「領域教科を合わせた指導及び自立活動を主とした教育課程」が必要となったからである。（教育課程３）二つ目には知的障害は軽度であるが、家庭の状況等により施設に入所し、本校へ就学することになったケースが増えたこともある。（教育課程１）

教育課程１　教科と領域教科を合わせた指導を主とする教育課程
教育課程２　領域教科を合わせた指導を主とする教育課程
教育課程３　領域教科を合わせた指導と自立活動の指導を主とする課程であり、自閉症の児童生徒に対応した教育課程
教育課程４　自立活動を主とする肢体不自由を有する児童生徒に対応した教育課程
教育課程５　自立活動を主とする訪問教育の教育課程

そして、試行錯誤しながらよりよい教育課程を編成すべく見直し、検討を重ねてきている。（以下「課程３」と称す）

課程３においては、心理的な安定や対人関係の向上を図りながら学習に取り組んできた。あわせて刺激に対して過敏性をもっている児童生徒について人的、物的に環境設定に配慮をしてきた。この取り組みにより、児童生徒は心理的にも安定する様子が見られ、学校生活を円滑に送ることができるようになってきた。

これまでの取り組みから、一人一人の教育的ニーズに合わせた教育課程の編成と自立活動の重要性を確認することができ、課題も明らかになっている。

そこで本研究により、これまでの自立活動の取り組みを整理検討し、知的障害を主とする特別支援学校における自閉症の特性に応じた教育課程編成について、さらに深めていければと考える。

また、特別支援学校学習指導要領の改訂に伴い、自立活動に「人間関係の形成」が新たに加わったことにより、従来の心理的な安定と対人関係の向上を含めて、自立活動の指導における指導内容、方法について検討を図り，指導の充実を図りたい。そして、自閉症に対する指導の専門性も日々の授業実践をとおし、高めていきたい。合わせて教材教具のリスト化を図り、地域におけるセンター的な役割も担っていきたいと考える。

2　研究内容

1. 研究テーマ

「知的障害を主とする特別支援学校における自閉症の特性に応じた教育課程の編成と人間関係の形成を中心とした自立活動の指導に関する研究」

2. 研究仮説

○児童生徒一人一人の教育的ニーズに合わせた個別の指導計画を作成し、ＰＤＣＡサイクルを取り入れた実践による児童生徒の変容を検討することで、自閉症の特性に合わせた教育課程の有効性について検証できるであろう。

○自立活動の「時間における指導」と各教科、領域教科を合わせた指導等の中で行われる「配慮して行われる指導」に視点をあて、個別の指導計画を作成し、実践を通して指導内容や方法を検討することで、各教育課程における「人間関係の形成」を含む自立活動の指導のあり方を整理することができるだろう。

3. 現状の分析と研究の目的

上記のような教育課程を編成し、一人一人の教育的ニーズに合わせた指導に取り組んでいる。研究を通し、この教育課程の編成が適切であるのか検討すると共に内容等について整理する。方法としては各教育課程より事例児童生徒をあげ、個別の指導計画に基づくＰＤＣＡサイクルを活用した授業実践を行い、児童生徒の変容を検討することで教育課程の有効性について考察する。また、「人間関係の形成」を含めた自立活動の指導についてにも同様に取り組むことを通して、自立活動の指導内容や方法について整理検討を行う。

3　評価の方法

○評価の方法　・評価の観点

＜一年次＞

○ＰＤＣＡサイクルを取り入れた個別の指導計画の活用を図ることにより、教育課程編成の有効性について検討し評価を行う。

・（事例対象児童生徒の）個別の指導計画の立案・実施・評価を通して，一人一人の教育的ニーズに応じた教育課程の編成と指導の実践がされているかについて

・学習課題及び教材・教具等の有効性について

○中間報告会を実施し、外部評価を行う。

・（事例対象児童生徒の）個別の指導計画の妥当性と教育的ニーズに応じた授業実践がなされているかについて

・教育課程編成の有効性について

・（事例対象児童生徒の）「人間関係の形成」を含む自立活動に関する個別の指導計画の妥当性と指導内容や方法の有効性について

○研究運営協議委員を委託し研究運営協議会を通して、外部評価を行う。

・研究内容の妥当性について
・（事例対象児童生徒の）個別の指導計画の妥当性と教育的ニーズに応じた授業実践がなされているかについて
・教育課程編成の有効性について
・（事例対象児童生徒の）「人間関係の形成」を含む自立活動に関する個別の指導計画の妥当性と指導内容や方法の有効性について

＜二年次＞
○一年次の成果と課題をふまえ、さらにＰＤＣＡサイクルを取り入れた個別の指導計画の活用を図ることにより、教育課程編成の有効性について検討し評価を行う。
・（事例対象児童生徒の）個別の指導計画の立案・実施・評価を通して，一人一人の教育的ニーズに応じた教育課程の編成と指導の実践がされているかについて
○研究発表会を実施し、外部評価を行う。
・（事例対象児童生徒の）個別の指導計画の妥当性と教育的ニーズに応じた授業実践がなされているかについて
・教育課程編成の有効性について
・（事例対象児童生徒の）「人間関係の形成」を含む自立活動に関する個別の指導計画の妥当性と指導内容や方法の有効性について
○保護者、養育園，のびろ学園の職員を対象にアンケートを実施し、外部評価を行う。
・事例対象児童生徒の学習上，生活上の変容について（行動の変容）
○研究運営協議委員を委託し研究運営協議会を通して、外部評価を行う。
・研究内容の妥当性について
○教育課程についてのアンケートを職員に実施し、内部評価を行う。
・５つの教育課程の有効性について

4　研究経過

1.　１学期の取り組み（４月～７月）

４、５月　1）全体研究会
・平成２１年度の研究の取り組みについて
・指導案、事例児度生徒について
・個別の指導計画について

今年度は個別の指導計画の実態把握－長期目標－短期目標－授業(本時の目標)のつながりを意識できるよう、事例児童生徒の個別の指導計画の抜粋を資料として作成した。

６　月　1）各学部（小学部・中学部・高等部・自立活動部）の取り組み
・各学部ごとに研究の進め方についての確認
・事例児童生徒の選出
・授業研究会で取り上げる内容の決定

個別の指導計画の実践場面が授業であると捉え、授業研究会を通し、個別の指導計画を検証することと考えた。取り組む内容については各学部の意向を汲み決めた。事例児童生徒は、教育課程１～５から選出し、それぞれの教育課程について検証できるようにした。

2. 夏季休業中の取り組み（７月～８月）

７　月　1）全体研修会（全２回）

・「自閉症のある子どもを支援するために」
講師　本校職員

2）全体研修会

・「自閉症の理解と支援」
講師　明治安田こころの健康財団　新井利明先生

８　月　1）全体研修会

・「ソーシャルスキルトレーニングについて」
講師　夢風舎舎長　土屋徹先生

2)全体研修会

・「障害特性に応じた課題設定、指導支援」
講師　淑徳大学発達臨床研究センター　石井みや子先生

3）各学部の取り組み

・新版Ｋ式発達検査研修会
・事例児童生徒の理解を深める

事例児童生徒の実態を把握し、それからどのように目標を設定したのかという点について、各学部それぞれ共通理解を図った。また、実施した新版Ｋ式発達検査の結果をどのように目標を設定するときに取り入れるかなどということについても、本校職員を講師に研修会を開き学んだ。

3. ２学期の取り組み（９月～１２月）

９　月　1）平成２１年度「自閉症に対応した教育課程のあり方に関する調査研究事業」連絡協議会

以下のような課題が出された。
・自立活動の共通理解。「人間関係の形成」に着目する前に自立活動全般を理解してから始めることが必要である。
・実践の結果からどのような成果が見られたか客観的な根拠を示すとあるが、その具体的な方法についてどのように考えるのか。
・教育課程３の取り組みの整理については自立活動の内容を中心にまとめる。
→研究の進め方、考え方について若干修正をした。
・自立活動では、「人間関係の形成」だけに着目するのではなく、他の項目との関連を検討すること。

・実践の結果について今年度は、個別の指導計画を通して行い、事例児童生徒を通し、その変容をまとめることとした。客観的な根拠を示すという具体的な方法についてチェックリストなど有効ではないか。今後の課題として取り組むこことする。
・自立活動の内容については、指導案に目標と手立てを記載する。内容については個別指導計画を通しまとめることとした。
※チェックリストは、本校で独自に作成した。教育内容の指針となる内容であり、児童生徒の現在の発達段階や次の段階ではどのような内容であるのかわかるものである。児童生徒の実態把握、学習内容の設定、評価に使える。

2）各学部の取り組み
・授業研究会に向けての準備（指導案検討、教材教具準備等）

１０　月　1）全体研修会
・「ソーシャルスキルトレーニング授業の実際について」
講師　夢風舎舎長　土屋徹先生
2）各学部の取り組み
・授業研究会に向けての準備（指導案検討、教材教具準備等）

１１　月　1）第１回研究運営協議会

運営協議委員より以下のようなご意見、ご指導をいただいた。
・教育課程１～３のどこに視点をあてて整理するのか、絞った方がよいのでは。
・教育課程３の自立活動の指導内容や方法、教材・教具を整理してまとめたらよいのではないか。
・教育課程３の実践と教育課程１、２とのつながりについても合わせて整理できるとよい。

2）小学部全体研究会
講師　千葉県立富里特別支援学校教諭　鈴木彰典先生
3）高等部全体研究会
講師　淑徳大学教授　澤口英夫先生

１２　月　1）中学部全体研究会
講師　千葉県教育庁東上総教育事務所指導主事　金坂京子先生
2）全体研修会
「自閉症の自立活動の指導支援について」
～社会性発達アセスメントと支援を通して～
講師　筑波大学教授　長崎勤先生
3）各学部の取り組み
・中間報告会に向けての準備（指導案検討、教材教具準備等）
・教材教具集作成

4.　３学期の取り組み（１月～３月）

１　月　　1）全体研修会

・「ソーシャルスキルトレーニング授業の実際について」

講師　夢風舎舎長　土屋徹先生

2）中間報告会

講師　千葉県立富里特別支援学校教諭　鈴木彰典先生

講師　千葉県教育庁東上総教育事務所指導主事　金坂京子先生

講師　淑徳大学教授　澤口英夫先生

3）第２回研究運営協議会

・授業参観

・評価アンケート

運営協議委員より以下のようなご意見、ご指導をいただいた。

○個別の指導計画を作成する際には、将来の生活を考えた、学習内容、学習方法の検討が必要である。また、実態把握を深め、教育内容を設定することが大切である。

○個別の指導計画作成において、長期、短期目標を設定する際に、「人間関係の形成」に関して、児童生徒にどのような力をつけてほしいのか、どのようになってほしいのかという点について指導案に明確に記載し、授業で実践することが必要である。

○指導案作成において、自立活動の目標、手だてを記載したことについて評価できるが、それが般化できていたのか、再度検討を行う必要がある。

○学習指導案において、本研究に関する記述があるとわかりやすい。特に「人間関係の形成」「自閉症の特性に合わせた指導・支援」について、またこのことの評価についてわかりやすく記述することが大切である。

○個別のスケジュールの使用について。変更に弱い、ルーティンで憶えているという児童生徒は変更等を教えるためにも個別のスケジュールは必要である。

これらの点についても、今後の課題として取り組んでいく。

２　月　　1）第３回研究運営協議会

・今年度の研究の成果と課題

・平成２２年度の研究の取り組みについて

３　月　　1）全体研究会

・今年度の研究の成果と課題

・平成２２年度の研究の取り組みについて

5　成果と課題

今年度は、教育課程の編成について一人一人の教育的ニーズに応じていたのかということ、また、自立活動の内容等についても、個別の指導計画を整理、検証すること

を行ってきた。個別の指導計画で作成した目標を授業で実践していると捉え、授業研究会を通し、検証した。事例児童生徒を挙げて検証したが、個別の指導計画と授業とがどのように結びついているのかという点につき、指導案に資料という形で整理した。

事例児童生徒について

個別の指導計画から抜粋　　○○学部○年○組（○○班）　A・A

本人・保護者の願い
○本人から△に就職したい。保護者からはさせたい。など本人の希望をきくことが 難しい場合には、保護者の希望を。

児童、生徒の様子
○日頃の様子や検査結果等々。取り組む教科の目標を裏付けるような様子を書く。

年間目標（長期目標）
○取り組む教科に関することの抜粋
○自立活動（人間関係の形成）から抜粋

取り組む教科名　１学期の目標（短期目標）
○年間の目標を具体的にしたもの。
評　　価　児童生徒の様子や教師のてだてについて記載

自立活動（人間関係の形成）１学期の目標（短期目標）
評　　価

目標の見直し

取り組む教科名　２学期の目標（短期目標）
○指導案の個々の本時の目標の内容とつながりを意識して記載
評　　価

上記のように、個別の指導計画を整理したことで、児童生徒の実態から、長期、短期目標、本時の目標が結びついたということが各学部より意見として出されている。

◇目標やステップの見直し、教材の提示方法の工夫や改善により、児童の変容につながった。（小学部の記載より）

このような取り組みより個人の目標をより意識した授業作りを行うことで、児童生徒に変容が見られたと思われる。

しかしながら、ＰＤＣＡサイクルを取り入れた個別の指導計画という視点から整理すると、評価、改善の充実までには至らなかった。ＰＤＣＡサイクルが円滑に作用することで児童生徒の変容がさらに見られるのではないかと思われる。

自立活動については、資料に記載したことで、自立活動に対し、意識して指導支援を行うことができた。また、指導案の中では自立活動の記載を以下のように行った。

指導案からの抜粋

氏名	児童生徒の様子	本時の目標	手だて
		・教科、領域教科を合わせた指導についての目標	・教科、領域教科を合わせた指導についての手だて
		・自立活動、人間関係の形成についての目標	・自立活動、人間関係の形成についての手だて

このことで、教科、領域教科を合わせた指導の中で行われる、「配慮して行う指導」に視点をあて、自立活動を意識した授業作りができたと思われる。

◇買い物を題材にお金の計算とマナーに取り組むことで、実際の買い物で、レジの列に並んで買い物ができた。多動性のある生徒については、教師と１対１で活動する場面を設定することで教師と適切の関係を気づくことができた。（中学部の記載より）

という成果がまとめられている。

しかし、「配慮して行う指導」と「時間における指導」との内容の整理というところについては至らなかったので次年度の課題としたい。

自立活動については、テーマである、「人間関係の形成」に着目するあまり、自立活動という枠で捉えず、その部分だけ取り上げてしまった。自立活動のとらえ方についても課題であると思われる。

自閉症の特性に応じた指導支援では、児童生徒が見通しを持って、落ち着いた環境で学習に取り組めるというところに取り組んできた。

◇視覚的な支援や提示の工夫、環境の見直しや学習内容の組み方を工夫することで児童が落ち着いて学習に取り組む、自らやろうという姿が見られた。（小学部の記載より）

◇聴覚過敏の生徒にイヤーマフを使用することで、安心して学習に取り組むことができるようになった。（中学部の記載より）

◇具体物を示す写真カードや思いを伝える絵カードを用いたことで担任とコミュニケーションを図ることができるようになり、作業への取り組みがスムーズになった。また、作業だけでなく日頃の学習場面や生活場面にも変容が見られた。（高等部の記載より）

このように自立活動の内容を意識的に取り入れたことで、児童生徒に変容が見られるようになったことは成果だと思われるが、一人一人の実態にあった指導支援であったのかということは整理や検証が必要であろう。

小学部、中学部、高等部、自立活動部の今年度の成果と課題について以下に記す。

1. 小学部の研究について

今年度小学部では、全校の研究テーマに基づき、以下の３点を中心に検討・協議を進めてきた。

○　自閉的な傾向を持つ児童を事例対象児童として取りあげ、目標設定から計画、実践、評価への経過の流れを整理すること

○　作成した事例対象児童の資料を基に、個人の目標とのつながりを意識した授業づくりをすること
○　自立活動の区分として新しく加わった「人間関係の形成」について学んでいくこと

一学期は、事例児童の選出と取り組む授業の決定をし、実態把握から目標の設定、実際の授業との関連について形式に沿って整理し、実践と結びつけていくことを試みた。また、「人間関係の形成」についての目標も合わせて設定した。実態把握については、毎年行っている新版Ｋ式発達検査の解釈について研修を行い、それぞれの児童の発達の特性やつまずきなどについて学ぶ機会を持った。

一学期の取り組みを基に、夏季休業中にグループ検討会を行った。「国語・算数」と「自立活動」で１グループとし、「生活単元学習」との２グループに分かれて行った。各事例児童についての実態把握や目標設定、授業を実践してみての経過についての共通理解を図り、目標の見直しや手だての工夫等、２学期に向けての方向性について検討を行った。

二学期は、各事例について検討してきたことを踏まえ、授業研究会を行った。生活単元学習３事例､自立活動１事例の計４事例について授業展開を行う予定であったが、インフルエンザによる学校閉鎖のため、指導案と資料を通しての協議会を行った。よりきめ細かな実態把握の必要性、そこから設定した目標を基に、学校生活ではどの場面でどういう支援を行っていくのか、結果をどう考え次につなげていくのか、しっかり捉えていくことが大切であるとご指導いただいた。また、自閉症の児童が人間関係や社会性に関することを学んでいくに当たっては、段階に応じた形で、意図的に場面を設定して取り組んでいく必要があることや、他校や各機関の先行研究の例についてもお話いただいた。

三学期は中間報告会として、「国語・算数」１事例、「生活単元学習」１授業２事例の授業展開をし、ご指導いただいた。各授業、事例児童に対する実践を通し、「ニーズに応じた支援」という流れの中で障害の特性理解や人間関係の形成といった視点が大切になるということ、実態把握から実践への流れの中の各段階での評価の大切さについて改めて確認がされた。

成果と課題

○個別の指導計画に基づく授業について

事例児童について実態把握からの流れを整理、文章化し、それを基に教員間での検討を行っていくことは、個人の目標をより意識した授業づくりにつながっていったのではないかと考えられる。目標やステップの見直し、教材の提示方法の工夫や改善などにより、児童の変容につながっていったことは成果と言えるであろう。しかしまだ、具体的な目標設定や実践へのつながり、評価のあり方には課題があると言える。今年度授業として取りあげた、「国語・算数」や「自立活動」など、個別に近い学習形態で、年間を通して行うことができる内容の授業では、内容や目標を焦点化しやすいことや、継続した指導が可能なことにより比較的取り組みやすかった。一方、「生活単元学習」は、内容が一定の期間の活動であることも多く、また、様々な児童が一緒に

活動する中での個々の捉え方に難しさがあったと感想が出された。個々のねらいを年間の大きな枠で捉えた上でのより計画的な設定が必要であり、また、学習集団が大きくなるほど、授業の組み立てや資料の作成に当たって、より教員間の共通理解や検討が密にされる必要が感じられた。今年度、計画や実践の段階での教員間での検討の時間が十分に確保できたとは言えない。授業を振り返りながらの教員間での検討こそが大切であり、そのためには、日々の実践記録と個別の指導計画をよりよい形で活用させながら、日常的に話し合いながら実践を進めていくことを目指したい。

また、具体的な指導方針を立てるための実態把握の重要性については、今年度多くの先生方からご指導頂いた点である。今後は、先行研究を参考にしたチェックリストの活用なども考えられる。

○自立活動（人間関係の形成）について

自立活動はすべての場面で指導しているもの、というように大きく捉えている部分もあったが、今回、どの指導場面で何をねらうのか、と記載するに当たり、改めてその内容について考える機会を持つことができた。自立活動の区分はどれもリンクしているもので、分けて考えることは難しいといった感想も聞かれたが、どういう力をどのような支援を行いながら育てていきたいのか、意識して取り組んでいくための第一歩となったのではないかと考えられる。今年度、「人間関係の形成」の捉え方についての共通理解が十分でなかったという反省が残る。小学部段階、また、各児童の発達の段階を考えての、身につけていきたい力やどの場面でどのような支援を行っていくかという検討が今後必要であると思われる。

○自閉症の特性に応じた指導・支援について

今年度、各研修会や協議等、研究の取り組みを通して、自閉症の支援について学び実践に取り入れていくことができた。ただこれらは、一人ひとりに応じた支援として考えていったことが結果的に自閉症の特性に応じた支援につながっていったとも言える。視覚的な支援や提示の工夫、学習環境の見直しや学習内容の組み方等、工夫を加えていくことにより、児童が落ち着いて学習に取り組めたり、自らやろうとする姿が見られたり、といった成果が見られた。しかし、まだ、児童にとっての取り組みやすい、わかりやすい状況づくり、支援の工夫については十分でない部分も多く、引き続き今後も検討していきたい。

2. 中学部の研究について

中学部では、３つのポイントでテーマに迫ることとした。

１点は、個々のニーズに応じた個別の指導計画の作成である。実態把握、長期・短期の目標や支援までのつながりを大切にして、個々のニーズに応じた授業作りに取り組もうと考えた。

２点目は、自立活動、特に「人間関係の形成」の指導・支援である。学校生活全般

を通じて取り組む自立活動について目標や手だて等を明確にし、授業の中で自立活動（人間関係の形成）に関する指導を行おうと考えた。

３点目は、自閉症の特性に応じた指導・支援である。これについては、自閉的傾向を有する生徒を事例にあげて指導・支援を検討し、変容を見ていくこととした。

まず、取り上げる授業として「国語・数学」を選んだ。「国語・数学」は、学級で取り組んでおり、生徒や授業について担任間で共通理解を図って生徒の実態に応じた授業を作りやすい。また、個別の指導計画を授業に反映しやすいと考えた。さらに、「国語・数学」は、日課上、年間を通じて帯状に設けられており、継続的な指導・支援を行うことができる。以上のこと等から、「国語・数学」を取り上げることとした。

また、自閉的傾向を有する生徒を事例生徒として各学級から１名あげた。夏季休業中には、事例生徒について作成した「国語・数学」及び自立活動（人間関係の形成）の目標・評価の資料と、１学期の授業のビデオを用いて、事例検討を行った。生徒の実態を共通理解したり、活動内容や支援方法を検討したりした。普段は授業を見合うことが難しいことから、お互いの授業を知る有意義な機会となった。資料に関しては、実態から目標につながりがあるか等を確認し、目標のつながりを考える機会となった。

１２月の授業研究会では、講師から具体的な助言・指導をいただいた。いくつかを以下にあげる。まず、展開した授業に関してである。気持ちカードの使用では、感情の表現とともに感情の段階を教えていくことで、少しずつ感情をコントロールすることができること。集団学習（ゲーム等、ルールがある活動）では、個に応じたルールを設定して活動すること。次に、自立活動（人間関係の形成を中心に）についてである。人間関係の形成をどのように捉え、「国語・数学」の授業で「国語・数学」と「人間関係の形成」をどう指導するのか検討が必要であること。自立活動は「人間関係の形成」だけでなく、「健康の保持」や「コミュニケーション」等、生徒に必要な他の内容とも関連づけて指導・支援することが重要であること。さらに、自閉症の特性に合わせた指導、支援を授業の中に生かすための助言もいただいた。学習形態は、目的に応じた集団の大きさを検討することが必要であること。安心する環境、わかりやすい環境を作るために、物理的な環境の調整と、見通しのもち方や支援のタイミング等の教師の対応の工夫が大切であること。スケジュール表や課題学習の終わり等、見通しをもたせるための提示は、生徒の実態に応じてわかりやすいものにすること。

自閉症に応じた指導・支援を行うには自閉症に応じた観点を明確にして評価する必要があること。以上のことは、今後の研究に生かしていきたい。

成果と課題

〇個別の指導計画

事例生徒をあげて資料を作成し、国語・数学と自立活動（人間関係の形成）について検討したことで、アセスメントから目標のつながりを意識することができた。しかし、２学期、３学期になると、年間目標と学期の目標のつながりが曖昧になることがあったことから、この点が今後の課題となる。また、適切な目標をたてるためには、適切なアセスメントが課題として考えられる。アセスメントを行うための観点を整理することが必要である。

○自立活動（人間関係の形成）

国語・数学で人間関係の形成に関する内容にどう取り組むかを考えることで、「国語・数学」の授業と人間関係の形成との関連を考えて実践することができた。

買い物を題材にお金の計算とマナーに取り組むことで、実際の場面でレジの列に並ぶ姿が見られた。授業への参加が難しかった生徒には、少人数のグループを組んだり、できる課題を中心に取り組んだりすることで、落ち着いて参加できるようになった。多動性のある生徒には、教師と１対１で活動する場面を設けることで、教師との適切な関係が築かれ、着席して学習できる時間が増えた。また、ゲーム性のある活動を設定することで教師や友だちと関わる姿が見られた。

一方で、人間関係の形成を意識した授業作りにより、活動内容に自立活動の要素が強くなったり、集団学習を主体として取り組むことが多くなったりした。自立活動は教育活動全般を通して取り組むものと捉え、授業でいかに人間関係の形成に関する指導・支援に取り組むかが課題である。また、他者との関わりや集団参加の実態から、目標に応じた集団の大きさ、学習内容の検討が必要となる。

○自閉症の特性に応じた指導・支援

視覚的な支援については、個に応じて文字や絵を併用したスケジュール提示をしたり、プリント学習で答えの手がかりや書きやすい枠を用意したりすることができた。また、生徒が注目できるようにホワイトボードを使用することで提示物の刺激を整理することができた。物理的な環境の調整については、パーテーションを設置等、適切な場の設定をすることで刺激を制限することができ落ち着いて活動できた。聴覚の過敏な生徒には、イヤーマフを使用することで、安心して学習に取り組める姿が見られた。今後も、生徒にとってわかりやすい環境や安心して取り組める環境を作れるように、支援を徹底していきたい。教師の関わり方については、個に応じた言葉かけ、支援のタイミングを実践することができた。個に応じた効果的なかかわり方の検討は今後も必要である。さらに、自分で考えたクイズを他者に出題する題材を用いることで、相手にわかりやすく伝えるという言葉の使い方に取り組むことができた。他者への言葉のかけ方、言葉のやりとりを指導・支援し、繰り返し取り組むことで、日常生活でも他者との会話が成り立つようになってきた。他者とのかかわりに関する指導・支援について今後も検討していきたい。

自閉症に応じた指導・支援を行うには、観点を明確にして評価することが大切であり、その観点の検討が課題となる。観点を明確にし、個に応じた適切な指導・支援を行っていきたいと考えている。

3. 高等部の研究について

高等部の生徒達はまもなく学校生活を終えるが、どの生徒にとっても卒業後は、社の中で周囲の人と関わりながら生活をしていくことになる。そこで生徒達の「社会自立」をふまえ、「働く」活動の中で個々の教育的ニーズに応じた指導について、「個別の指導計画」と「自閉症の特性に応じた指導」「自立活動」をキーワードとし、高等部教育課程の中心である作業学習を通して、研究を進めることにした。

今年度の取り組みとしては、年度当初に各学級から事例生徒選出し、生徒の様子の把握（見取り）を「個別の指導計画」の作成と併せて行った。生徒の実態把握にあたっては、「新版Ｋ式発達検査」や「職業・生活のチェックリスト」を実施した。「新版Ｋ式発達検査」については部内研修会を実施して、検査方法や検査後の結果からどう考え、生徒の指導目標を設定していけばよいのか等について研修をしながら実施した。

作業学習では学級担任が作業学習を担当していないケースもあり、作業学習担当と学級担任との連携が重要である。そこで、今年度は生徒について話し合う時間を設定した。発達検査等の結果とともに日々の様子をふまえて学級担任と作業学習担当者で話し合い、生徒の目標設定や指導方法、支援について様々な意見交換をした。そうした話し合いをとおして共通理解が図られ、長期・短期目標が整理され、より具体的に設定をすることができるようになった。さらにどのような学習内容が目標の達成に向けて適切なのか、あるいはそのための支援や手だてはどのようなものがよいのか等、職員間で多くの意見交換をした。特に夏季休業中は高等部職員全員で事例生徒について作業学習や「自立活動」の指導内容等について集中的に話し合う場を持った。そこで話題になったことを２学期の目標設定や指導に生かすようにした。

２学期はこれまで取り組んできたことをふまえ、生徒個々の教育的ニーズを考えた指導のあり方について検討してきた。「自閉症の特性に応じた指導」とはどのようなものか、「人間関係の形成を中心とした自立活動」の指導についてはどのように考え、実践していけばよいか等、「個別の指導計画」をふまえて実践した。また、今一度作業学習における作業の進め方や補助具、自閉症の生徒達への配慮や支援について検討し、授業の中で見直してきた。

１１月の授業研究会では、作業学習５班中、陶芸班、手工芸班の授業を中心に展開し、研究協議をした。研究会にあたり、事例生徒については「作業学習の目標」と「自立活動」の目標をあえて分けて検討するようにした。その中で個々の生徒の教育的ニーズを様々な視点から検討し、作業学習の目標として指導していくことと、「自立活動」の目標として生活全般を通して指導をしていくことについて話し合ってきた。研究協議では、実際の指導場面について、個々の生徒に対する学習内容や支援のあり方、具体的な目標設定についての考え方、生徒の心情に配慮した支援や手だてについて等、多くの具体的な意見が出された。特にパニックを起こしやすい生徒に対して、写真カードの効果的な活用や自分の気持ちのセルフコントロールの重要性等が協議された。講師の指導として①モノ作りを通した人とのつながり、②個々の生徒への支援の工夫、といったことがポイントとして出された。①についてはモノ作りとしての作業学習の特徴を再確認する機会となった。②については目標設定を工夫し、生徒にとってのわかりやすさへの工夫や作業に向かう動機付けの必要性など、支援の観点などを提示していただいた。今後の指導に参考にいかしていきたい。

成果と課題

成果

○「個別の指導計画」について

・発達検査について研修してきたことで、生徒の実態把握や長期、短期目標の設定

の上でとても有意義であった。併せて、事例生徒の「個別の指導計画」の作成を通して個々の教育的ニーズに応じた指導について見直すことができた。

・個々の生徒の「自立活動」の指導について検討してきたが、人間関係の形成を中心とした自立活動の指導についてだけでなく、「自立活動」の指導についての意識が高まり、指導に反映することができた。

○「自閉症の特性に応じた指導」について

・障害特性をふまえた指導について学級担任と作業担当で相談をして、目標や手だてを見直し、生徒にとってわかりやすい目標設定や教材の工夫、教師の関わり方などを改めて考えていくことにつながった。

・生徒の気持ちを見取る、あるいは生徒からの発信を促すという点で、具体物を示す写真カードや自分の思いを伝える絵カードを用いたことで担任とやりとりをし、コミュニケーションが図られるようになってきた。こうした関わりの中で作業への取り組みがスムーズになるなど、生徒の変容が見られるようになってきた。

○「自立活動（人間関係の形成を中心として）」について

・「自立活動」の内容をより意識した指導を進めてくることができた。気持ちを表す絵カードを用いるなどの手だてを講じたことで、作業学習のみならず、日頃の学習場面や生活場面から少しずつ変わってきた生徒もいる。

・「自立活動」の目標や指導内容、支援について授業の中でどのように考えていくことが必要かを整理して考えていくきっかけとなった。

課題

・生徒個々の年間目標と短期目標、授業毎の目標等について、評価の観点がより明確になるよう、具体的な場面設定の中で検討していく必要がある。

・生徒個々の実態把握をし、目標設定をしてきたが、実際の指導場面の中で実態→個別の目標→支援のつながりをより明確にとらえた指導をしていくようにしたい。

・授業において、わかりやすさの支援は大切である。視覚的手だてとして写真カードや手順表の活用や、目標を設定するときに時間的な目標なのか、数量的目標なのか、質的目標なのかなど、生徒の実態に応じて検討していく必要がある。

・作業学習と「自立活動」の指導内容がどのように関連づけられていくのかを十分に検討し、今後はより具体的な指導場面から目標が設定され、学習内容、手だてを考え、評価をしやすい（＝わかりやすい）ようにしていくことが大事である。

学校生活の全ての場面で関わってくる「自立活動」は個々の教育的ニーズを考えた指導という点ではとても重要である。次年度の研究の中で検討していきたい

4. 自立活動部の研究について

全体の研究テーマの「人間関係の形成を中心とした自立活動の指導」を受けて、自立活動部として指導に取り組んできた。その中では、身体の動きや認知・コミュニケーションの指導とともに心のケアとしての自立活動も実施しており、対象のうち自閉症やその様相を呈している児童生徒は約 4 分の 1 を占めている。心のケアでは、言語

でのコミュニケーションが可能であるため 1 対 1 でのカウンセリングを中心に、刺激の整理や行動、考えの枠組みを形成することに配慮しながら気持ちの安定を図れるようにしている。受容や共感の関わりを通して、「自分は受け入れられている」と感じることができることや、教師との関係の中で好ましい人間関係を身に付けられるように、会話を通してフィードバックしていくことをねらっている。心のケアでは授業研究を行っていないため、この稿では、自立活動部の認知・コミュニケーション指導の取り組みについてまとめた。

抽出指導では、担任からの主訴を受けて基本的に週 1 回 45 分の抽出指導を行っている。全抽出児童生徒のうち自閉症やその様相を呈している者は 37 名中 19 名であり、半数を占めている。身体の動きに関しては、認知・コミュニケーション（週 1 回）の指導の中で、身体の動きを通して自己認識や相手に合わせる力などもねらっている場合が多い。自立活動部では、一人ひとりに自立活動（抽出）の個別の指導計画を作成しており、学級での自立活動のねらいを受けて、長期目標と短期目標を立てて指導を行っている。また、学級担任との連携を図るために、指導内容や様子などを連絡帳や口頭で伝えることで、学級での学習状況や変容などの情報を得るようにしてきた。同様に保護者との連携も連絡帳や授業参観を行うことで実際に授業の様子を見てもらい、指導内容や方針の理解を図ってきた。

今年度は、小学部と中学部の児童生徒 1 名ずつを取り上げ、授業研究を行った。小学部は抽出指導 2 年目の 2 年生の男子である。指導開始時は人とのかかわりが希薄で、自分の好きな本や音楽で一人遊びをすることが多く見られ、手をつないだり、相手に合わせたりすることが難しかった。文字や数字などに関しては読み・書きが可能であるが、文字や数字カードをきれいに並べることにこだわりが見られたり、言葉はあるがコミュニケーションとしてはあまり活用されていない様子が見られたりした。そこで、「他者とのコミュニケーションがとりにくいので、認知面を伸ばしつつ、やりとりができるような支援をして欲しい」という主訴を受けて抽出指導を開始した。

中学部は、抽出指導 1 年目の 2 年生の男子である。場面の切り替えが困難で、生活パターンへのこだわりややりたいことができないことでのパニックなども見られた。

また、立位などでの姿勢の保持が難しく、自分の身体意識の弱さも見られたため、「姿勢を保持する力や自分で意思を伝える力をつけて欲しい。ひらがなの読み・書きができるようになって欲しい」という主訴を受けて取り組んできた。

成果と課題

・小学部の事例では、コミュニケーションの基礎的な力を高めるために、「自分の体に意識を向ける」というねらいで、体の動きの課題を取り入れた。初めは触れられていることを意識できず、独り言を言っていたが、動かす部位に意識を向けることができるようになると、「どこを動かすの？」と聞かれて自分の体に手を当てることができるようになった。さらには、関わっている教師を意識するようになり、自分の体を通してのやりとりができるようになったことは、大きな変容であった。

・認知面では、型はめやパズル、文字や数字の読み書き、積み木の構成などの視知覚課題は得意であったが、積み木を何かに見たてたり、複数の要素を含む絵を読み取った

りすることなどは苦手であった。そこで、得意な細部を見分ける力を生かしつつ、相手に合わせて課題を行うことでパターンを崩したり、指さしの課題を行うことで視線の共有を図ったり、絵を読み取って関係の深いものをマッチングさせたりする課題を行った。教材を媒介にして、教師の提示に合わせて課題を行うことができるようになると、柔軟性のあるやりとりが可能になり、自分から関わって欲しいと要求する場面も見られるようになった。

・中学部の事例では、姿勢の保持や身体意識の向上のために、仰臥位での腕上げやあぐら座位での腰の動きと踏みしめを重点的に行ってきた。腕上げでは、おしゃべりに夢中になってしまい、自分の腕を動かされていることに意識を向けることが難しかったが、動かす方向や力の入れ方や抜き方などを言葉と動きの誘導で伝えるようにすると、次第におしゃべりが減り、自分の体の動きに意識を向けることができるようになってきた。また、座位での踏みしめの練習でも、動かす部位を具体的に誘導されることで、教師の指示に従って動かすことができるようになった。お尻での踏みしめ感はまだ不十分であるため、さらに自分の身体に対する意識を高め、足裏全体で大地を踏みしめる感じをつかむことで、姿勢だけではなく、気持ちの安定にもつなげていきたい。

・文字の学習では、視知覚が優位であるため、一音一語は５０音表から選択することができるようになってきている。しかし、二音一語は、単語を視覚的なパターンとして弁別することはできても、文字がバラバラになると構成することが難しくなるため、５０音の弁別や読みを確実にするとともに、単語の構成、さらには聞き取りの課題にも取り組んでいく必要があるだろう。

・自分の意思を伝える力は、動詞や言葉の理解や表現方法が不十分であることから、まだ限られたものである。しかし、得意な視知覚への提示を工夫することによって、何をすれば良いかが分かりやすくなり、拒否や混乱が減少してきたため、今後はマカトンサインなどを使いながら言葉の表出を促し、語彙を豊かにしていくことが大切になるだろう。

この２つの事例については、いずれも文字や数字、パズルなど細部を見ることは得意であるが、全体を読み取るなどの力は弱いことや名詞は分かっても具体的にイメージすることが苦手だったり、自分の体に対する意識が弱かったりするなどの側面が共通していた。しかし、上記のような体の動きを通した学習や、得意な力を伸ばしながら苦手な課題にも取り組むことで、「人に合わせる力」や「自分と相手の関係性の理解」、「変化に対する応用力」などが高まってきたように思われる。このような学習に刺激が整理された分かりやすい環境の中で取り組むことや、個々の児童生徒の得意な力や不得意な力を的確に把握することで、有効な指導につなげていくことができるだろう。

6　今後の展望

前項に記載した課題解決の具体的内容を以下のようにまとめることができる。

○「個別の指導計画」について

アセスメント、目標設定、評価の観点を明確にするために

・アセスメントについては、新版Ｋ式発達検査や本校独自のチェックリスト（※１）を

活用する。

・アセスメントに基づき、個々の教育的ニーズに応じた個別の年間目標、単元や題材における目標など目標設定、課題設定をする。

・授業研究会を通して、目標設定や課題設定の妥当性について、児童生徒の様子と関連付けながら検討する。

・日々の授業について「授業充実のための話し合いの時間」（※２）を設定し、個別指導計画に基づき評価する。目標設定や課題設定の妥当性を検討し、次の目標設定を行う。

○自立活動について

「人間関係の形成」を含む自立活動の指導内容や方法の検討するために

・アセスメントをより明確にし、目標設定が的確になされるよう、「コミュニケーション」「スケジュール」のチェックリスト（※３）を実施する。コミュニケーション手段やスケジュールの提示方法を検討することで個々のニーズに応じた支援方法を明確にする。

・社会性発達支援プログラム（※４）を活用する。「人間関係の形成」に関する実態把握、目標設定、授業実践、評価に用いる。

・「時間における指導」教科、領域教科を合わせた指導等の中で行われる「配慮して行う指導」についての個別の指導計画を作成し、授業研究を行う。児童生徒の変容を検討することで、各教育課程における自立活動のあり方を整理する。

上記の項目に沿った取り組みを通して、研究テーマである自閉症の特性に応じた教育課程の編成の有効性と各教育課程における「人間関係の形成」を含む自立活動の指導方法や内容について整理検討したい。

※１「本校独自のチェックリスト」

児童生徒の実態把握、目標設定、学習内容の設定、評価に活用できる。

実践を通して加除修正していく形態をとっている。

※２「授業充実のための話し合いの時間」

毎週金曜日に設定する。担任、授業担当者間で話し合い、個別の指導計画の評価として保存していく。

※３「コミュニケーション」「スケジュール」のチェックリスト

千葉県総合教育センター作成

コミュニケーション、スケジュールを作成する際に、個々の実態に合わせたものを作成するためのチェックリスト

※４「社会性発達支援プログラム」　編著　長崎勤、中村晋、吉井勘人、若井広太郎